

共立女子大学文芸学部報



お花見

猫吸い

お花見が嫌いだ。

そもそも人混みが嫌いなのだ。うるさいし、騒がしいし、頭も痛くなる。お花見なんて、人混み＋アルコールでしょ？ 勘弁してほしい。ただでさえうるさいおじさん達が更にうるさくなって騒ぎ出す。信じられない。春花粉だって勘弁してほしいんだから。

だから私はお花見に行かない。毎年友達に誘われても、家族に近所の公園に誘われても、行かない。私はお花見とは無縁なの！ これでいいの!! このマインドだ。これで二十年生きていく。

私の祖母はパワフルだ。私とは正反対。休みの日は一人でハイキングとかしててらしい。もちろん誘われたことがある。断固拒否だ。でも祖母と一番仲良かったのは多分私。祖母の作るアジフライが大好きだし、畑仕事の手伝い

もお姉ちゃんより私のほうがしてた。仲いい証拠に、祖母は私にだけお菓子を買ってきてくれたりした。アウトドアにはうんざりだけど、大好きだった。で、死んじゃった。早すぎ。来年こそ一緒にハイキングしようと思っていたのに。アジフライの作り方伝授してくれるって言ったのに。病氣だったなんて全然教えてくれないまま急に死んじゃった。北の丸公園の桜、すごい綺麗だから美久ちゃん、一緒に行きましよう。夜なら人も少なくていいのよ」

お花見が嫌いだ。人混みが嫌いだし、春花粉だって嫌い。でも、夜のお花見は悪くないかもしれない。

手にしていたスマートフォンで目の前の桜を撮った。

おばあちゃん、綺麗だね。

マテリアル・ラブ

或る猫

新宿にあるレトロな雰囲気のカフェで君はウインナーコーヒーを頼む。スズランみたいな形のライトが古い白熱灯の光を落とす。「面白かったよ、どこがどう、とは言えないけど、好きな本だった」聞き慣れた甘い声で、あまりにも抽象的な感想をくれる。

哲学基礎の講義で仲良くなり、それから遊びに出かけるようになった。お互いの積ん読を消化するために始まった本の交換もこれに設置されているからか、さつきから副流煙を浴びま

くっている。コーヒーの熱さよりも彼女の顔にかかる煙を気にして欲しい。

プラトニック・ラブを望んでいた私に賛同し、我々の間に所謂性愛はなかった。そういうのは他所で済ませよう。干渉しないで、好きにしよう。嫉妬こそ人間たる感情だ、と説いたのも私だった。俗

への逆張りがしたいのか、サルトルとボーヴォワールへの憧れからかは覚えていないけ

共立女子大学文芸学部報
第146号
発行日 2025年1月17日
編集・発行 共立女子大学
文芸学部
〒101-8437
東京都千代田区
一ツ橋2-2-1
発行責任者 阿部由香子
創刊 1968年12月
題字 遠藤慎吾
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・ご感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。
gakubuho
@kyoritsu-wu.ac.jp

学部報は共立女子大学公式HPの「文芸学部」のコーナーでもお読みになれます。



第146号 主目次	
第1面・第2面	第3回フォト&ストーリー・コンテスト
第2面	茗荷円先生インタビュー
第3面	俳壇・歌壇 学部長から
第4面	領域から 心象点描



空

猫派

さようならの合唱。やっと終わった、やっと帰れる。大して重くないリュックを背負って、直ぐに携帯の電源を入れる。

ホームルームが終わると、クラスメイトたちは掃除に向かったり、部活に向かったり、隣のクラスに遊びに行ったりと忙しい六時間授業を耐えたダメージなど全く感じられなくて、自分だけ年寄りになったような感覚に陥る。

殆どの人が自転車登校だから、自転車置き場はいつも自転車が乱雑に溢れかえっている。そのせいで自転車は本当に取り出しづらくて、ここは、「直行直帰」を掲げているわたしのちょっとした関門である。これ乗り越えても、家まで五〇分もボロ自転車を漕がなくてはならないのだけだ。

なんでこんな高校を受験しちゃったんだろうと、毎日、いや毎時間毎分毎秒、思っている。中学のときは学校が楽しくて楽しくて仕方がなかったのに、今は億劫で堪らない。他校に行った友達の

雨の日は

水無月

僕は雨が好きだ。窓の側で永遠に雨の音を聴いていたし、雨の日の夜はどれだけ仕事で疲れていても、決まって傘とカメラを持って外へ行く。

雨の匂いも、どんよりとした空も、水溜まりに反射した街を眺めるのも全部好きだ。傘はビニール傘がいい。街灯に照らされて、雨の雫がイルミネーションのように輝くから。

みんな梅雨が憂鬱だと言うけれど、僕は毎年梅雨が待ち遠しい。そう思いながら、咲きかけの紫陽花を揺らす雨粒をただ見つめていた。

雨の日の夜。街の中へ溶け込むと、憂いに満ちた空とは裏腹に地上は賑やかだと感じる。

腕を組んで歩くカップル、二人お揃いのキーホルダーを鞆につけた女子高生、子どもと手を繋いで晩御飯の話をしている母親。周りを見渡すと笑顔に溢れている。ああ、たかいたか空気を感じる。僕はあまり好きではない。思い出すから。

街を抜けると一気に静寂に包まれる。雨の音だけが響き渡り、自分一人が世界に取り残されたような感覚。その感覚を噛み締めるの

だった。

今までも幾度となく噛み締めてきたけれど、まだ足りない。きっと、一生足りることはないのだろう。毎日雨でもいいと願うくらい、僕は雨を愛しているから。

シャッターを切る。街の外れから街を撮る。雨が降っている日はより輝いて見えて幻想的なんだ。まるで魔法がかかったみたいに。お気に入りの場所だった。忘れることのできない場所だった。僕の気持ちとは相反した街の輝かしさに思わず目が眩む。同時に胸が苦しくなった。

フィラメントが切れたときのような、何とも言い表せない仄暗い感情に支配されていたのだと思う。

ある時、大学時代の友人に聞かれたんだ。

「お前って昔、雨嫌いじゃなかったっけ。いつからそんなに好きになったの？」

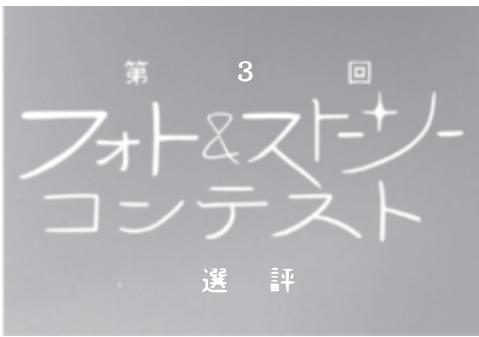
ああ。そんなの、決まっている。二年前に死んだ彼女が、雨を愛していたんだ」

これは、雨を愛する僕の二十五歳の頃の話。

雨の日には思い出す。何年経っても。今でも。



第3回フォト&ストーリー・コンテスト
選評は2面に



いような日常と空虚な現実とのギャップ、一昔前のインテリカッブルのような関係と、プラトニック・ラブとセフレとが入り混じる現代性とのギャップがおもしろい。」

沼田「カフェではなくレトロな喫茶店で、タイパを無視した時間を過ごす彼と彼女のいる風景——まだいるんだ。こういう子たち。安心したよ。具体的な感想をいう才能がおっぱいによって開花したのが秀逸です。」

吉澤「タバコ、ウインナーコピー、哲学基礎、プラトニック、雰囲気ある。でも何より突き出しのなポテサラが「君」の即物感を醸しています。」

吉澤「夕焼け空が橙というだけで、今日はもうけた、いただいた。しかも自転車50分、「やっと終わった、やっと帰れる」と、この空とのコラボは最強です。」

土田「読む人を作者の世界に引き込む不思議な力がある文章である。学校が「億劫で溜らない」「わたし」の心を照らすのは、下校途中に目にする燃えるような橙色の空。人間間というのは、案外こうした何気さとのコンビが、相補的に「切なさ」を仕上げて、美しい。」

沼田「曇り空の下の花の写真が、「お花見が嫌いな理由と果たせなかった祖母との花見」にマッチしている。」

吉澤弥生「人混み、アルコール、おじさん達、花粉・・・と清々しいまでのお花見デイス（わかる）からの、急逝したお祖母さんへの言葉の温かさ。夜桜のもわんとした写真とあいまって、胸がいっぱいになりました。」

第三回フォト&ストーリーの審査は、学部広報委員会の先生方4名にお願いし、一次審査を通過した作品に、1〜3位の順位をつけてもらい、それを3〜1点として加算する方式で最終順位を決めました。先生方の選評を抜粋して紹介します（敬称略）。

第1位「お花見」北村弥生「こんなことを書いてくれる孫娘がいたら、あの世へは逝かず、桜の樹皮の裏あたりにずっと潜んで毎年孫娘を待ち構えるだろう。嫌いということ、にもかかわらず見に来たという状況のコントラストと、色相を落とし下から見上げて撮った宇宙のからっぽさとのコンビが、相補的に「切なさ」を仕上げて、美しい。」

沼田知加「曇り空の下の花の写真が、「お花見が嫌いな理由と果たせなかった祖母との花見」にマッチしている。」

吉澤弥生「人混み、アルコール、おじさん達、花粉・・・と清々しいまでのお花見デイス（わかる）からの、急逝したお祖母さんへの言葉の温かさ。夜桜のもわんとした写真とあいまって、胸がいっぱいになりました。」

吉澤「夕焼け空が橙というだけで、今日はもうけた、いただいた。しかも自転車50分、「やっと終わった、やっと帰れる」と、この空とのコラボは最強です。」

土田「読む人を作者の世界に引き込む不思議な力がある文章である。学校が「億劫で溜らない」「わたし」の心を照らすのは、下校途中に目にする燃えるような橙色の空。人間間間というのは、案外こうした何気さとのコンビが、相補的に「切なさ」を仕上げて、美しい。」

沼田「曇り空の下の花の写真が、「お花見が嫌いな理由と果たせなかった祖母との花見」にマッチしている。」

吉澤弥生「人混み、アルコール、おじさん達、花粉・・・と清々しいまでのお花見デイス（わかる）からの、急逝したお祖母さんへの言葉の温かさ。夜桜のもわんとした写真とあいまって、胸がいっぱいになりました。」

第2位「マテリアル・ラブ」土田牧子「哲学基礎」で出会った彼と、互いの本を交換して読みあう。一見すると充足感に溢れて

いような日常と空虚な現実とのギャップ、一昔前のインテリカッブルのような関係と、プラトニック・ラブとセフレとが入り混じる現代性とのギャップがおもしろい。」

沼田「カフェではなくレトロな喫茶店で、タイパを無視した時間を過ごす彼と彼女のいる風景——まだいるんだ。こういう子たち。安心したよ。具体的な感想をいう才能がおっぱいによって開花したのが秀逸です。」

吉澤「タバコ、ウインナーコピー、哲学基礎、プラトニック、雰囲気ある。でも何より突き出しのなポテサラが「君」の即物感を醸しています。」

吉澤「夕焼け空が橙というだけで、今日はもうけた、いただいた。しかも自転車50分、「やっと終わった、やっと帰れる」と、この空とのコラボは最強です。」

土田「読む人を作者の世界に引き込む不思議な力がある文章である。学校が「億劫で溜らない」「わたし」の心を照らすのは、下校途中に目にする燃えるような橙色の空。人間間間というのは、案外こうした何気さとのコンビが、相補的に「切なさ」を仕上げて、美しい。」

沼田「曇り空の下の花の写真が、「お花見が嫌いな理由と果たせなかった祖母との花見」にマッチしている。」

吉澤弥生「人混み、アルコール、おじさん達、花粉・・・と清々しいまでのお花見デイス（わかる）からの、急逝したお祖母さんへの言葉の温かさ。夜桜のもわんとした写真とあいまって、胸がいっぱいになりました。」

茗荷円先生 (言語・文学領域) インタビュー

聞き手 福嶋伸洋

ご専門について

茗荷先生は今年度に専任講師として着任されたんですが、非常勤としても長く共立にお勤めになられていたんですね。

茗荷 そうですね、2011年の4月からお仕事をさせていただいております。

もう10年以上になるんですね。

茗荷 考えてみれば、そうですね。

ご専門の研究分野が日本語学、表現論、文体論とあるんですが、けれども、なじみのない人に向けて簡単に説明していただくとするところのようなものでしょうか？

茗荷 日本語学は日本語の仕組みについて、主には4分野、大きい分野があって、文法、音韻・音声、文字表記、あと語彙と意味、その4分野ですね。それらを総合して、日本語の表現や文章を観察して分析して、どういう印象がもたらされるかということや、文章ジャンルや個人の「らしさ」がどのように表れているか、見てゆくのが文法論や表現論かなと思います。

ご研究の内容は、具体的にどのようなものでしょうか？

茗荷 近代の女性を書いた書簡文の文体ですとか、表現の研究が専門です。

書簡って言うとプライベートな文章ってことですか？

茗荷 そうですね。大正期ぐらいから書簡文なんて呼ばれずに手紙文というふうに呼ばれるようになったのですが、候文体とか、擬古文とか、雅俗折衷文体みたいな



な、昔の文体で書かれてたときは、やっぱりちょっと私的なやりとりでも書簡文って呼ばれてたんです。言文一致運動で、口語体で書かれるようになってからは、手紙っていう表記が多くなった気がします。

文体の変化によって、内容の変化もあつたんでしょうか？

茗荷 口語文体は、自分の気持ちを細々と書き綴れることが特徴なので、候文体の時よりは感情表現の細かさや豊かさが見られるようになりました。内容（命題）はさほど文体と関係ないと思うのですが、いかに細かく心情表現がされるようになったか、ということですね。

ニュアンスが表現されている。

茗荷 そうですね。ニュアンスまでもが。

その研究の延長線上で、現代の日本語にアプローチしたりされているんですか？

茗荷 書簡文を直接活かした授業は今はないのですが、「日本語学概論」で、会話文、コミュニケーションで……日本語って述語や語尾変化によって伝わり方のニュアンスっていうのが変わってくるんですよ。念押しの「だよね」と

か疑問とかいろいろあつて、そういった細かい日本語の伝わり方についてはちょっとは活かせるかなと思います。

具体的に、授業ではどういう題材を取り上げていますか？

茗荷 「日本語学概論」は概論な

ので、いろいろな分野の説明なんですけど、「日本語学演習」では学生が書き言葉、とくに近現代の書き言葉で自分が興味を持ったこととか、おもしろいなと思ったことを何でも良いので取り上げて、それについてなぜそのように思うのか、データを取って、それを論拠として分析してゆきます。書簡文研究の学生は今年一人いました。近代の日本語も扱っているの、そういうのに興味を持って近代小説の文章を取り上げる学生もいます。何でもい

んですよ。近現代の……話し言葉というよりは書き言葉ですね。

書き言葉が多いですか？

茗荷 そうですね。あとは学生がどんなテーマを研究の対象にするかという、広告文のキャッチコピーとか、あとよくあるのは歌の歌詞の研究とか、普通に小説の表現色彩語の表現とか、商品やキャラクターの名前についての傾向の分析、そのあたりが多いですね。

データを取るとどう客観的なアプローチですね。

茗荷 たぶん文学研究よりは、自分で数を数えて、統計をとってという作業が多いのではないかと思います。

品詞とかですか？

茗荷 そうですね、それからある語いが何回出てくるかとか、あとこういう表現がどこで見られているかみたいなことを数量調査します。それをするのは文学とは違って日本語学の結構大きな特徴だと思います。ちょっと数学という

か算数のような要素を入れているっていう感じですかね。そこに適宜質的研究も加えて。独創性やオリジナリティ、あとは総合的に物事を見て分析できる力っていうのは意外とつくような気がします。

マーケティングに手法は似ているかなと思いますね。

共立と文芸学部について

共立で教えられ始めてから10年以上ですが、学生についてはどんな印象を持たれていますか？

茗荷 優しく、思いやりのある方が多いと思います。人に配慮のできる学生が多い印象です。

文芸学部の特徴がもしありませんか？

茗荷 そうかもしれないですね。

ゼミの雰囲気とかリアクションの感じとかどうですか？

茗荷 文芸ということ、自分の興味があることを深く追究している学生がやっぱり多いかなと思います。

それを他の人にも共有できるというか、客観的に特徴とか性質とかを示していくっていうのが研究ですよ。

茗荷 そうですね。

今はゼミは何人くらい担当してらっしゃるんですか？

茗荷 ゼミは3年生が13人、4年生も13人ですね。

どんなテーマがありますか？

茗荷 テーマは結構みんないろいろで、なかなかおもしろいのは、駅伝の実況中継の言語的な特徴とか、目の付け所がいいですね。

茗荷 ですすね。あとはイチゴの名称ですかね。商品名の特徴を日本語学的な観点からまず分析してみ、まあ色合いや形状が似ている、サクランボの商品名と比較してみるとか。結構身の回りのことが材料になることが多いかなと思います。

イチゴって何種類くらいあるんですかね？

茗荷 100種類以上はあるみたいです。

そんなにあるんですね。

茗荷 ええ、もつとあるらしいのですが今回100種ぐらいは調査してくださって言って、それで和語か漢語とか表記とか、あと音の響きとか、多角的に調査をし

て、データを取って傾向を見ていきますね。

時代的な変遷とかも？

茗荷 絶対あると思うんですけど、どうでしょうね。学生の調査結果が楽しみです。

楽しみですね。

茗荷 はい。あとは映画の字幕と吹き替えの日本語の違いとか。

なるほど。

茗荷 それからK・POPって今流行っていますよね。その、K・POPの人たちが日本人向けに作った日本語のK・POPがあるってご存知ですか？ その歌詞とか、あとは韓国語を日本語に訳した歌詞っていうのが時に違和感を覚えたり、ちょっとダサイという印象を受けるんですけど。その理由を探るっていう研究。これはすごく難しいですけど。

感覚としてはわかりますね。それを客観化するってすごく難しいですけど、チャレンジしたいですね。

茗荷 今はAIが言語の形態素分析をしてくれて、さらにどういう語とどういう語が一緒に出てくるかとか、どの語とどの語との結びつきが強いとか、そういうのを出してくれるので、そのAIの分析にもちょっと頼って。

「ダサさ」というのを客観的に示すっていうのは非常に難しいから、結局は文末表現や人称など定期的にマークできるものしか、最終的には判断材料にならないような気がするのですが……。

茗荷 はい。言葉を使っているのここだけちょっと女っぽくなっているとか、ここだけ乱れているからなんかおかしいと思うとか。

あとは、これはこれから学生が挑戦するんですけど、コーパスってありますよね。あれで時代を設定して、こういう言葉の使われ方が何年代ぐらいによく見られたか観察していくんですね。現代の日本の若者から見ると「死語」↓古

い↓ダサイとなるような感じですかね。時代の差っていうことで指摘できるかもしれません。

好きなもの

最後、好きなこととか、お休みの日の過ごし方とかをお聞きたいです。

茗荷 好きなことはちょっといろいろ考えてみたんですけど、そして「好きなこと」というよりは「好きなもの」になつてしまふのが、チョココミントが好きです。チョココミント関連のものは、大体ちょっと一回は試しているというか。一番好きなのはチョココミントのアイスです。商品として多いのはチョコレートですけども。本館4階の売店にサティワンのアイスが売られていて、チョココミントが入ったんですけど、最近。なので非常にうれしくてさっそく買って食べました。

サティワンは前からありましたけど。

茗荷 チョコミントはなかった気がしますね。ポップンのような名前のものはあったと思うんですけど。

昔からお好きなんですか？

茗荷 小学校2年の時に初めて出会いました。小学校2年生のときに友達のお母さんが、エキスポ？展示会っていうのかな。屋外のイベントみたいなものに連れていかれて、そこでアイスが売られてたんです。その友達のお母さんが問答無用でチョココミントのアイスを全員に買ってくれて。それで初めて食べて、すごくおいしいと思って、それ以来ですね。ハーゲンダッツも昔チョココミント味を出していたのってご存知ですか？ あれは本格路線なのかもしれないが、フタを開けたらアイスが白かったんです！ 衝撃を受けましたね。ちょっとショックでした。やっぱりチョココミントは緑じゃないと。色合いも重要です。

俳壇

題「雲」

テーマ「野菜」

秋空やものを思へば雲の飛ぶ	上野 愼也
無患子の梢を見上げて雲ひとつ	上野 愼也
届かなあの日雲に 風	藤原 達也
鞆の児の蹴り上げし雲ひとつ	藤原 達也
親知らず明日抜きます峰の雲	遠藤 耕太郎
白雲の赤き睡蓮のせて水面に	黒須 貴志子
先生も飲む焼き芋フラペチーノ	太田 万宝子
わた雲に木の棒刺してはむ仕事	ちくわ パン
雲隠れしても誰にも探されず	五味 澤瞳
白い雲友とほおぼる夏祭り	油 揚 げ
百日紅雲のキャンバス蹴散らして	生駒 桃子
入道雲君もきゅうりも笑み浮かぶ	岡田 ひろみ
汗をかきブラックコーデを悔いる雲	片山 耕 一 郎
「煮魚ね」母見る空にはうろこぐも	ときし おん
雪雲の覆う駅前君を待つ	大宮 夜之

若冲の野菜は寝釈迦あきうらら

藤原 達也

秋茄子は黒い揺りかご伊太利亜の

藤原 達也

冬のみちどこへ去ったか焼き芋屋

五味 澤瞳

昔から煮物にいたよとズッキーニ

遠藤 耕太郎

知ってたよ俺はテメーのパセリ君

深津 謙 一 郎

芋痞へ金星に澄む秋の空

上野 愼也

鉢転げ朽ちた大葉をなお抱え

黒須 貴志子

季が移り茗荷抜きでは箸取れぬ

今井 秀 和

米を研ぎ水のぬるきに春を知る

茗 荷 円

とうきびや君も私もあつすぎる

北島 百恵

青い顔50個食べたミニトマト

柏倉 萌 花

取れたての茄子の牛にも涙かな

大宮 夜之

枝豆やビールと始まる夏休み

咲本 英恵

雨雲に土の匂いとした豆腐

中野 風 彩

農家からもらって秋ださつまいも

ルリノ スケ

歌壇

題「香」

沈黙をつらぬいたのち幽霊は龍涎香の由来を話す
雨谷 詩穂

鑒眞の編衫撫づる金堂の柱 故山縁側の木香
上野 愼也

きんもくせい見えぬものこそ貴いとその香りもて人に語りて
黒須 貴志子

残菊の香りかすかに赤とんぼためらいつつも羽を沈めて
黒須 貴志子

香煙の白糸立ちて宙に消ゆその行く末は誰も知らない
ねこ

風が吹き夜が早まる五時限目強く香った金木屋
佐久 真

桃の香ただよう七月家の中なんだか今日は機嫌が良
うるこ

梅の香はマスク越しにも伝わりて春の訪れ街に知らせる
五味 澤瞳

お揃いの香の袋に妹背鶴薄くなれども想い忘れじ
大宮 夜之

病の痛み忘れさせるよ抱擁の中祖母の愛情香るよう
にして
藤江 梨莉



テーマ「家族」



朝五時に電話をよこすおばあちゃん「もしもし起きてる?」「まだ寝てないよ。」 限界卒論執筆ネキ

家事の手を休めし君と家事をせぬドラマの人に心躍らす 藜

去年まで姉とわけてた肉まんを一人で食べる街灯の下 うるこ

母の手が優しく磨いたローファーを脱いで今日から靴擦れの予感 うるこ

迎へ入れ見送りつくく人々の奇しき縁に我も連なり 上野 愼也

「あたらしいスタンプ欲しいなお姉さま」たまの LINEはいつもおねだり ちゃぼ

いつまでも足裏ボクロにビビる母帰省するたび記憶リセット ちゃぼ

「コレ観たな」映画終盤気づく父もう観た映画に初見の反応 ちゃぼ

待ちわびたサンタさんからお返事がかなり癖ある父の達筆 ひさばでん

母の味求めて逃る帰り道戸口で悟る今日カレーかな 不二山 みるき

ばらばらになっても家族は家族かなつかず離れずありたいものよ 五味 澤瞳

学部長から

九月から十月にかけて総合文化研究所の助成を受けて「演劇熱を爆発させた青年達」という展示を本館のロビーで開催しました。ちょうど百年前の一九二四年六月に青年達が築地小劇場という劇場を建てて、そこで自分たちが上演していた当時の新しい演劇を夢中になつて上演していました。その舞台の写真パネルやポスターをはじめ、本学所蔵の検閲上演台本を資料として展示した次第です。

文芸学部は創設時より演劇研究者が多数教員におり、初代学部長新関良三はドイツ演劇、なかでもシラーの研究者です。築地小劇場の文芸部に所属していた高橋邦太郎も文芸学部の教授でした。たぶん真夜中の本館ロビーで懐かしそうに写真パネルを見ている人影があったとすれば、彼らではないかと思えます。

実は古くて茶色い資料ばかりを展示したところで、興味を持って見てくれる人がいるかとても心配でした。しかし思いのほか皆さん「すごい」「すばらしい」と言ってくれました。何が「すごい」のか知識はなくとも圧倒されるだけの力を感じてくださったのだと思います。一番感動してくれたのは一階ロビーの警備員さんでした。朝、タイムカードをかざすたびに「いやあ、すごいね」「一度見たけれどもじっくりみたいね」「すばらしいね」と大絶賛でした。まったく予想していなかった反応でしたが、だからこそとても嬉しかったです。展示のお手伝いをしてくれた皆さんにも感謝申し上げます。

(芸術領域・教授・阿部由香子)

